満鉄興亡史

その栄光と悲劇

サンケイ新聞社会部

被爆都市

光と悲劇

新聞社会部

戦艦陸奥
〈その栄光と悲劇〉
サンケイ新聞社会部
（大阪）

昭和46年3月5日1刷
定価　五〇〇円

〈検印省略〉
発行者　竹内格
印刷　図書印刷株式会社
製本　田中製本印刷株式会社
発行所　サンケイ新聞社出版局
東京・中央区江戸橋一の七（103）
大阪・北区梅田町二七（530）

乱丁・落丁本はおとりかえします
© サンケイ新聞社 1971　Printed in Japan

0020-071605-2756

まえがき

「陸奥」は、ワシントン軍縮条約下最後の戦艦であり、装備の充実には、全海軍が叡智と心血を注いだ。乗員各人もまた、気迫と高潔な魂をこの軍艦に結晶させた。機器・精神ともに無欠の一個の芸術品といえよう。それ故に、列国は、建艦の追随を放棄した。「陸奥」はそれ自身の完璧性によって、長い時期、戦争抑止力となり得たのであった。〝栄光の巨艦〟の名が、まことふさわしい。

不幸にして、太平洋戦争ぼっ発し、「陸奥」また原因不明の爆破をとげたことは、千年の痛恨事であった。

不肖わたしは、かつて艦長の職にあったが、それは、海にいのちを捧げた軍人にとって、もっとも誇らしく、かつ、生きがいを感じた時期であった。

戦後、「陸奥」引き揚げにあたって、微力を捧げているのも、これが、うらみを残して海に散った英霊に対する鎮魂の礼事と信じるゆえであり、合わせて、原因、および爆発の、構造物に与える影響について、なんらかの究明がなされると期待するからである。

「陸奥」の全生涯は、まさしく長い栄光と、偶然の不幸におおわれており、それにもまして日本の海軍史の中枢を語るにふさわしい、歴史そのものである。

全面引き揚げが期待されるこの時期に「陸奥」の全貌をあますところなく伝える本書が刊行されることは、まことに意義深く、喜びにたえない。「陸奥」に関心を抱かれる人々にはもちろん、深く歴史と日本を愛される国民諸氏に一読されることを願っている。

紙上をかり「陸奥」の引き揚げ成功を祈願し、「陸奥」と命運をともにされた霊に合掌する。

昭和四十六年二月

元海軍中将、「陸奥」艦長
「陸奥」引揚期成会会長
日本国防協会会長
保科善四郎

すいせんのことば

昭和二十八年六月八日のことでございました。山口県大島郡東和町で「陸奥」戦没者慰霊祭をいとなんでいただいたさい、わたくしは、乗組の方々と、遺家族の人たちの名簿を頂戴しました。

そのとき、わたくしは、この名簿をたどって、ご遺族の家庭を訪問させていただこうと決心しました。乗組の方々は、たたかわず、うらみを残して散ってゆかれました。ご遺体のあがらぬ方々も多くございました。せめて、ご遺族をおなぐさめ申すのが、艦長の縁につながるわたくしの、つとめであろうと感じたしだいです。当時「陸奥」が引き揚げられるなど、思いもよらぬことでございました。

その決心も、果たさぬまま、時が流れ申しわけなく思いつつ、いま、一日として感謝の気持ちを思わぬ日はございません。「陸奥」引き揚げのお話が、みなさまの温かい、私心を捨てたおこころによりまして、実現の運びとなりました。とくに、昨年、病没された浜田悦三様にはお礼のことばもございません。また、慰霊祭も、毎年行なわれ、遺族の方々にもお目にかかる機会を得るようになりました。みなさまの数々のご尽力、ご献心は筆舌につくしがたく、ただ感謝の心でいっぱいです。

「戦艦陸奥」は、サンケイ新聞連載中から理解あり、かつ正確な記録であると思いつつ読ませていただいておりました。このたび、多くの方々に、真の「陸奥」の姿が伝えられることは、喜びにたえません。また、あますところないこの記録が、戦没者への何よりの回向であると信じております。

「陸奥」の遺体は、収容されることになりました。しかし、南方の海には、なお多くの英霊が、はるか故国を離れ眠っておられます。そのことを思えば、かえって心苦しく感じるこのごろです。

深くお祈りを捧げるしだいです。

三好近江

（沈没当時の三好輝彦艦長未亡人）

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

目次

9 序章／爆沈

昭和十八年六月八日

主砲塔ふっ飛ぶ

惨事は内ぶところで起こった

29 1章／原因追及
敵襲ではなかった！
「知らせてはならない」
秘匿作戦はじまる
続島の煙
非情な配転
査問委員会
三式弾への疑惑
深まるナゾ
63 2章／栄光の時代

「八・八艦隊」構想のホープ
あわただしい〝誕生〟
不沈の城
動乱の中で
月月火水木金金
太平洋戦争へ
115　3章／苦悩する巨艦
勝利の中の〝かげり〟
〝柱島艦隊〟
あいつぎ海底へ

131 4章／泥の中の27年
砲塔、江田島へ帰る
海底の魂
〝菊〟と泥棒
悲願つらぬく
難問解決
181 終章／あすへの遺産
水圧との戦い
未知への挑戦
偉大な〝海洋学者〟

魚礁の先輩

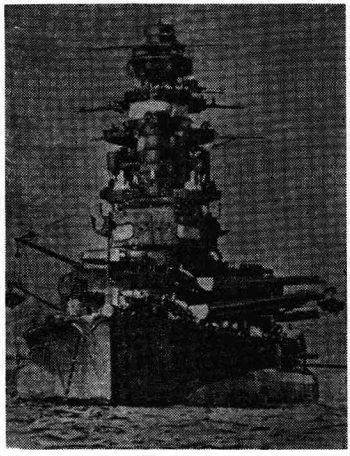
海底の若者たち

鉄塊の行くえ

装幀／入江健介
カバー写真／森泉憲一
イラストレーション／生頼範義
図版／渡部淳
レイアウト／梶野正子

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

序章　爆沈



昭和十八年六月八日

間もなく、梅雨が訪れようとしていた。前線が、瀬戸内上空に、へばりついており、灰色の空の日が続いた。

朝から霧が濃い。夜明けがおそかった。もっと明るくなってもいい時刻なのに、霧はますます深く、そのうち、乳色の霧が、小雨に変わった。

波もない。島影もない。近くにある僚艦の姿も、霧にとざされている。南海の決戦は、日に激烈の度を加えていた。きょうも、爆音と砲声が、とどろいているはずであったが、ここ柱島水道は、眠ったように静まっていた。

昭和十八年六月八日。

きのうと変わらぬ朝がすぎ、時計はやがて、一二〇〇（ひとふたまるまる＝正午）を指す。霧は、午後になっても晴れないだろう。

とりたてて、柱島水道に変わったことはなかった。しいてあげれば、この水域に待機する第一艦隊の旗艦が「陸奥」から「長門」に交代することになっていた。しかし、多くの水兵には関係のないことだった。

戦艦「陸奥」の艦尾に近い艦長公室では、三好輝彦艦長が、一人食卓に向かっていた。僚艦「扶桑」に鶴岡信道艦長を訪ね、帰艦したばかりであった。鶴岡大佐は、しきりに昼食を食っていけ、とすすめてくれたが、三好艦長は、

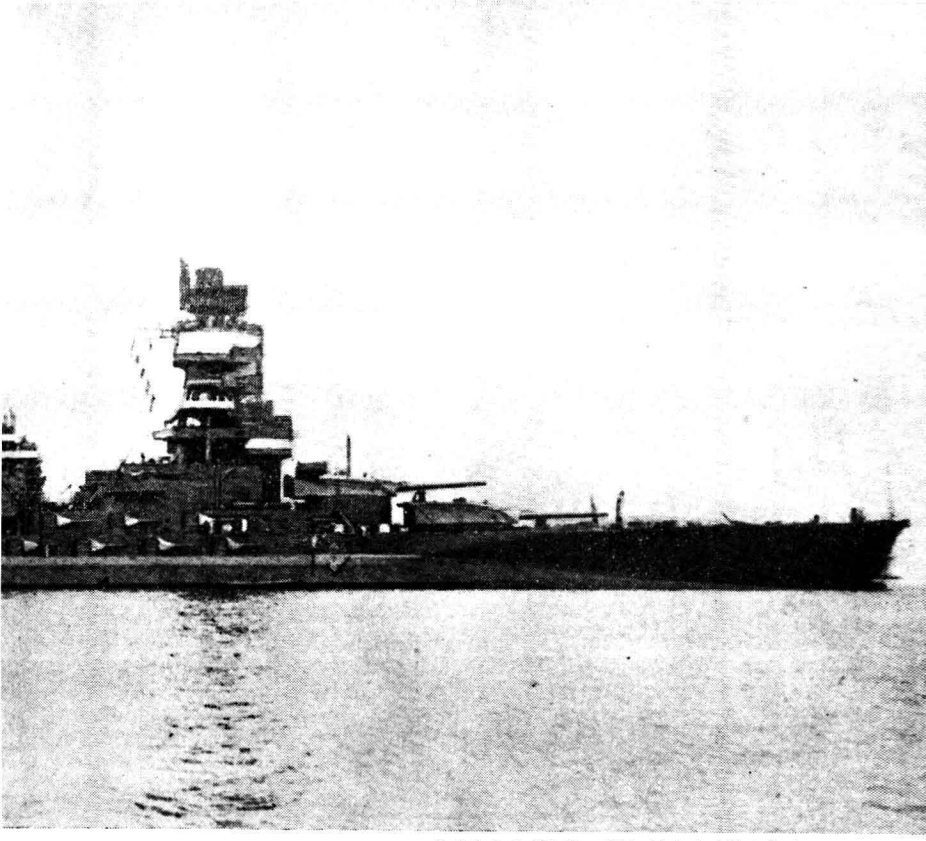
「いや、艦（ふね）を動かす時間なので」

と、ことわった。「陸奥」の移動は予定された作業で、とくに艦長の在艦を必要とするものではない。しかし、律義な三好艦長は、せっかくのさそいを、辞退したのであった。

沖原秀也航海長は、甲板にいた。「陸奥」は、五月三十一日、呉海軍工廠での入渠と整備補給を終え、柱島水道に帰着した。代わって、戦艦「長門」がドックにはいった。

「長門」「陸奥」を主力とする第一艦隊は、この時期「長門」を旗艦としていた。しかし「長門」がドック入りしている間「陸奥」が、その任についた。現在「陸奥」の停泊位置は、柱島と、屋代島を結ぶ線のほぼ中央。そこには「旗艦ブイ」があり、「陸奥」の長官公室は、このブイを通じ有線電話によって、呉鎮守府とつながっていた。

もうすぐ「長門」が、帰ってくる予定であった。「有線ブイ」のある旗艦の定位置を「長門」にゆずらねばなら



ありし日の「陸奥」。昭和12年大改装完成時。

ない。

沖原中佐は、その移動のための指揮にあたっていたのだ。機関が胴ぶるいしていた。水兵たちが、霧滴ですべる甲板の上を、なれた動作で、所定の作業をしていた。

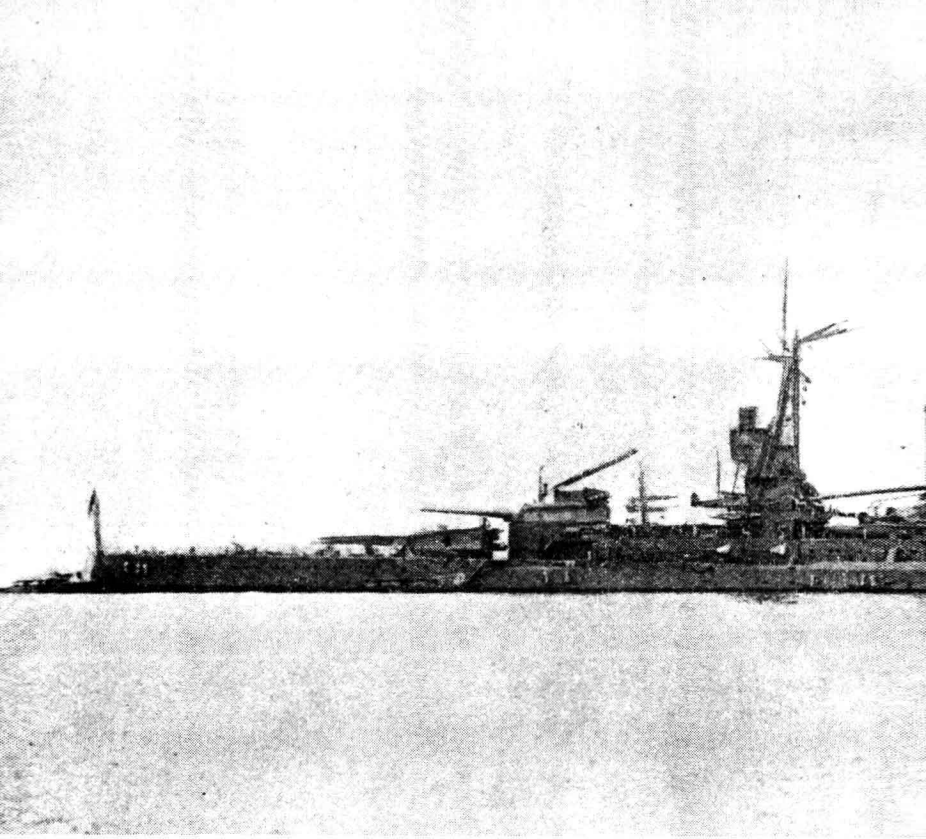
大部分の乗組員にとっては、くつろいだ時間であった。昼食はほぼ終わり、思い思いの姿勢で、しゃべり、タバコをふかした。

藤浪正一機関兵は、埼玉の故郷へ出した手紙のことを思い出していた。

こう書いた。

「先日の上陸が、たぶん最後だろうと思います。帰隊後、配置がえになると思っていましたが、また『陸奥』になりました。『陸奥』は、なかなか第一線に出ないので残念ですが……」

負けん気の藤浪水兵は「陸奥」に乗って、訓練ばかりつづけるのがいやであった。しかし、こんどは、出撃でき



そうである。

山梨出身の秋葉勝衛一等兵曹は、ちょうど一年前のことを思い出していた。秋葉一等兵曹の乗る空母「赤城」は、ミッドウェー作戦に参加した。開戦時のハワイ急襲に次ぐ、大作戦であった。

しかし、この作戦は、狂った。甲板上の攻撃機が発艦しようとした直前、米空母「ヨークタウン」「エンタープライズ」の爆撃機が殺到した。攻撃は「赤城」「加賀」「蒼竜」に集中した。魚雷を抱いた甲板上の飛行機が、まず火を発し、格納庫の弾薬に誘爆した。二十分足らずで「赤城」は火に包まれた。夜にはいって「赤城」は、放棄され、日本の魚雷によって沈没させられた。秋葉一等兵曹は、それをまのあたりに見た。駆逐艦に救助されて、いま「陸奥」にいる。

秋葉一等兵曹に、とむらい合戦の日が近づいている。

高見沢映・薬剤中尉は、歯科治療室にはいって、寝ころがっていた。ここは、患者がない限り、誰もはいってこない。

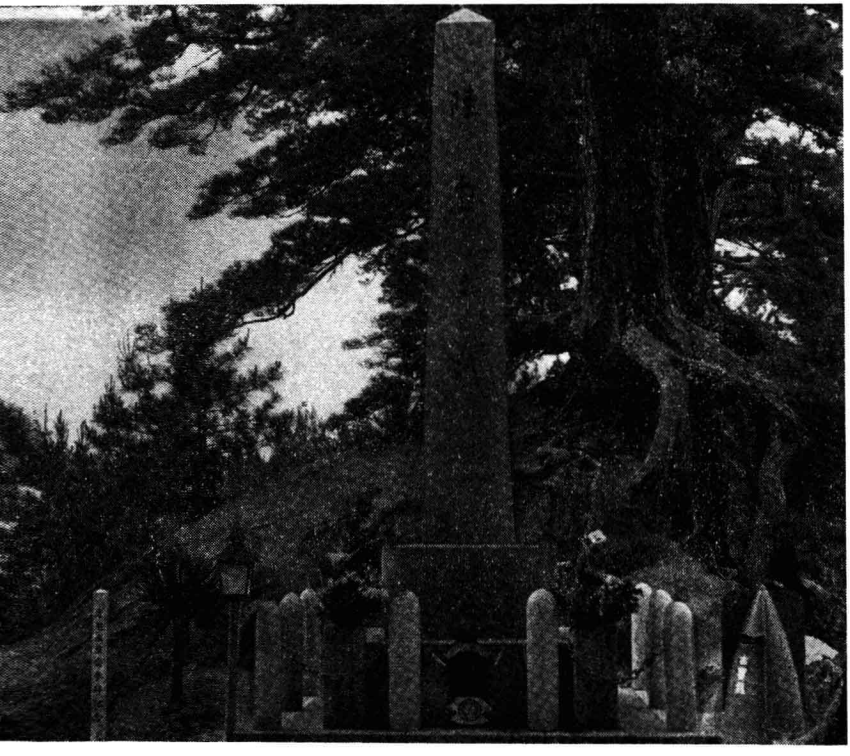
「出撃すればいそがしくなるな」

ぼんやり、そんなことを考えていた。

藤田侑吾兵曹長は、長官艇の操縦席にいた。長官艇は七日、第一艦隊司令長官、清水光美中将を乗せて「陸奥」を出発。同夜は、呉市で一泊した。清水長官と、司令部幹部は、陸上での打ち合わせがあったらしい。藤田兵曹長は、おかげで息抜きができた。

長官艇は、きょう午前十時、呉軍港を出発、水しぶきを切って、南下した。霧が濃かったが、藤田兵曹長にとっては、通いなれた航路である。へさきの方向には、前日の「陸奥」に代わって「長門」が、旗艦ブイに繋留しているはずであった。時計を見た。一二〇〇——であった。

山口県大島郡東和町の「陸奥之碑」。×印が「陸奥」沈没方向。



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c